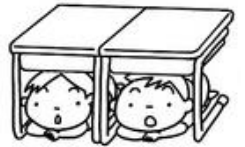




芝小だより

第三月号

発行所 港区立芝小学校
〒105-0014
港区芝 2-21-3
TEL:03-3456-3072
FAX:03-3456-3071



四たび「三月に思うこと、忘れてはいけないこと」

校長 齋藤 幸之介

先日は夏日に迫るにつかというほど気温が上がりましたが、しばらくするとまた元の寒さに戻りました。この時期には「三寒四温」という表現がそこかしこで聞かれますが、もうしばらくは寒暖を繰り返すことでしょう。新しい季節まであと少し、と自身に言い聞かせたいと思っています。

さて、過去三回の「芝小だより 第三月号」では、同じ表題でお伝えをしてまいりました。今年も同様に述べたいと思いますが、「新型コロナウイルス」に関することも加えたいと思います。しばらくの間、お付き合いくださいます。

今年こそは「焼けあとのちがい」の読み聞かせを

昨年度は、三月二日より始まった臨時休校により、子供たちに直接「焼けあとのちがい」(大月書店)を読み聞かせることは叶いませんでした。その代わりに「芝小だより 特別号」を発行し、ここに紹介をいたしました。臨時休校が明けると、一人の男の子が「絵本を読んだよ」と私に直接伝えてくれました。

残念ながら、この絵本をおかきになった半藤一利さんは一月二日にお亡くなりになりました。新聞はもちろんなこと、雑誌でも半藤さんを追悼する文章がいくつも掲載されました。評伝には、九死に一生を得たとされる東京大空襲といった戦争体験が根底にあったからこそ、戦争と平和について強く訴えられた、とあります。作家の保坂正康さんは、「半藤さんは東京大空襲で九死に一生を得た体験を語ってこられなかったが、「言わないと歴史に埋もれてしまう」、

と語り始めた」と述べられています(東京新聞一月一四日朝刊)。子供たちに向けてのメッセージとしてこの絵本が発行されたことは想像に難くありません。

今年の子供たちの前で、轡越ながら私が絵本を読みたいと思います。そして、一九四五年三月一〇日未明に起きた東京大空襲を捉え、「絶対」という言葉を一切お使いにならなかつた半藤さんが、絵本の最終ページに「戦争だけは絶対にはじめてはいけない」と表現された意味を子供たちに考えてもらえたら、と思っています。

あの日から十年経って

今年の三月一日は、東日本大震災が発生してからちょうど十年となる日です。ここ数カ月の報道には、東日本大震災を取り上げたものが例年よりも多く感じますが、皆様はいかがでしょうか。

先日の二月一三日の夜、東北地方を中心に最大震度六強の地震が起きました。東京の一部地域は震度四を記録しました。私の住む地域も大きくかつ長く揺れました。不安もしばらく続きました。山形県山形市に住む大学受験生は、コロナ禍であることも含めて「なぜこんなに試練か」と嘆いていました。

一方で、十年前を振り返り、また来るかもしれない災害に備えて様々な手立てを講じている人々が紹介されました。朝日新聞二月一六日朝刊の「悔やんで一〇年 備えた」というタイトルに、私は改めて身が引き締まる思いがしました。「減災」という表現も生まれ、万が一の際にはどうするか、という意識を常にもつことを改めて子供たちと確認をしたい、と思います。そして、悔やみきれない経験をされた方から改めて学び、今できることを子供たちと共に確認し、そして準備

をしていきたいと思っています。



「コロナ禍」びびるじい

新型コロナウイルス感染症に関するニュースは後を絶たず、この終息が全く見えない状況です。私が申し上げるのも失礼にあたるかもしれませんが、何をしてもしなくても、それとは異なる立場や考え方があることがいやというほど分かりました。

私共の周囲で最も大きな被害を被ったのは本校の子供たちです。約三カ月にも及んだ臨時休校という時間はもう戻ってきません。季節感あふれる活動、様々な行事も奪われまじた。現在の緊急事態宣言下でも登校が叶っているわけですから、「あの時は何だったのか」と怒りをぶつけられても、それに何も反論ができません。「あの時にはあれが最善だ」と判断した」ということもただの言い訳にしかすぎません。

しかし、私自身のことには棚上げさせていただいて申し上げれば、子供たちはこの緊急事態下で、本当によく頑張ったと、感謝を込めて申し上げたいと思います。毎日学校に歩を進める、中には黄色いランドセルを上下に揺らしながら走って学校に向かう姿はときに私の胸を締め付けました。そして今、何とか学校の門を開けて子供たちを迎え入れることができることを心から有難く思っています。

子供たちに「よく頑張った」として「たくましくなった」と声をかけるのは無責任でしょうか。それでも私は今の子供たちの姿を素直に認め、そしてまだまだ続くこの厳しさの中を共に歩んで行きたいと思います。

未来に語り継ぐことがまた一つ増えたかもしれませんが、しっかりと伝えられるように、過去から学び、今をしっかと進んでいきたいと思っています。